健常者が長く歩いたときに足の裏が痛くなるのと同じ感覚です。

市長　自分の体と義足が一体化しているようですね。障がいというよりも、そういう状況をあるがままに受け入れておられる、素晴らしい精神的な強さをお持ちですね。スポーツにしても障がい者のスポーツを特別のものと見るのか、それとも普通のスポーツとして捉えるのかだと思います。

　パラリンピックで伸びやかに体を動かし、きらめく姿を見せてくださった前川さんですが、私、実は津市スポーツ栄誉賞の表彰式で、前川さんのことを「前川選手は津市の障がい者スポーツの大きな１ページを開いた。しかもそのページは明るく輝かしいものだ」とご紹介しました。というのも、障がい者スポーツをどんなふうに見ればよいのか、少なくとも過去において多くの方が迷っていたと思うんですよね。例えば、大変だとか、あの障がいをどう乗り越えていくのだろうとか、そういう特別なまなざしで見てしまうことがあったかもしれません。パラリンピックは、同じ条件を持ったアスリート同士の競い合い、つまりスポーツの祭典ですよね。福祉の祭典というよりも、スポーツの祭典なのだからオリンピックと同じようにスポーツを楽しむ感覚で楽しめばいい。もちろん、スポーツする側も自然な形でスポーツしようという気持ちに至るまで、いろいろな過程があったと思いますが、障がい者スポーツの見方そのものが変わりつつあると思いました。

福祉ではなくスポーツ 見たまま感じて欲しい

前川　本当に見たまま感じていただければいいかと思います。義足や耳が聞こえないのに走るとか、目が見えないのに全力ダッシュするとか、

車いすで疾走するとか、見ているだけで本当に格好良い、そう思っていただけたら、私たちにとって一番うれしいことです。スポーツとして楽しんでいただけるのも本当に喜ばしいことですが、ハンディを負いながらもということではなくて、ハンディを「めっちゃ格好良くない？」という感じで見てもらえるとすごく幸せですね。

市長　津市は平成33年に国体を迎え、同じ年に全国障害者スポーツ大会も迎えます。行政組織の中では障がい者スポーツ大会は、福祉の部局が担当することが多いのですが、私たちはどちらの大会も最初からスポーツの舞台として整えて、熱い戦いを繰り広げていただきたいと考え、平成28年４月に国体・障害者スポーツ大会準備室を設置しました。健常者も障がい者も同じようにアスリートとしてのチャレンジを見せていただきたい。

前川　本当にうれしいことです。福祉という捉え方ではなくて、スポーツの一つとして、全国の皆さんに見ていただきたいです。

市長　前川選手のこれからの目標、夢、2020東京パラリンピックに懸ける思いをお聞かせください。

前川　リオでは自己ベストでも４位・７位という結果に終わったので、東京では自己ベストを出して、メダルも取りたいと思っています。

市長　2020東京パラリンピックで前川選手の勇躍される姿を大いに期待しています。津市民、全力で応援してまいります。

市長対談は津市ホームページ・市長の部屋の市長対談でもご覧いただけます。　HP 津市　市長対談　検索